

右京三条一坊十坪の調査

―第484次

はじめに

平城京右京三条一坊十坪北辺付近の調査。個人住宅の新築にともなう事前調査である。発掘調査は2011年7月21日から同月27日までの計5日間で、調査面積は33㎡である。同年10月には東側隣接地でも発掘調査を実施した(第487次調査)が、目立った遺構は検出していない。

層 序

調査区内の基本層序は次の通り。地表面以下70cmまでは現代の盛土で、その下位に層厚20cm程度の水田耕作土がある。それより下位は灰褐色シルト(床土)、黄褐色土、褐色砂質土と続く。これより下位には粗砂・細砂～シルトが堆積し、調査区の全域が埋没流路にあたる可能性が高い。奈良時代遺構の検出面は褐色砂質土上面である。

検出遺構

調査では①灰褐色シルト、②黄褐色土、③褐色砂質土の上面でそれぞれ遺構検出をおこなった。その結果、①および②の上面では耕作溝多数と現代土坑を検出するにとどまったが、③の上面では柱穴4基、土坑2基を検出した。柱穴SP3001とSP3002は長径90cmほどの隅丸方形で、東西方向に約3.5mを隔てている。SP3003とSP3004は調査区南壁で確認し、それぞれの北端を平面でも検出した。いずれも長径70cm程度の隅丸長方形で、東西方向に約3.5m離れている。SP3001とSP3003、SP3002とSP3004とはそれぞれ1.6mを隔てるのみで、同じ建物の柱穴とはみなしがたい。全容は不明ながら、SP3001と



図237 第484次調査区位置図 1:5000

SP3003、SP3002とSP3004がそれぞれ別の掘立柱建物であると考えたい。

このほか、調査区西端部では、奈良時代の遺構とみられる柱穴を2基(SP3005・SP3006)検出しているが、これらと組み合う柱穴は未確認である。

調査区西端で東西2m、南北約3mの範囲を掘り下げ、下層の遺構確認をおこなった。褐色砂質土より約30cm掘り下げた結果、埋没流路SX3009を検出した。流路の堆積物は粗砂、細砂～シルトである。この河川は褐色砂質土の下層に広がっており、南排水溝の土層観察では、粗砂→シルト→粘土という堆積のサイクルを確認した。

出土遺物

出土遺物は僅少で、時期が判明するものはほとんどない。

まとめ

本調査では、右京三条一坊十坪北辺付近において、奈良時代の掘立柱建物を一部検出し、下層に奈良時代以前の流路が埋没していることを確認した。(森川 実)

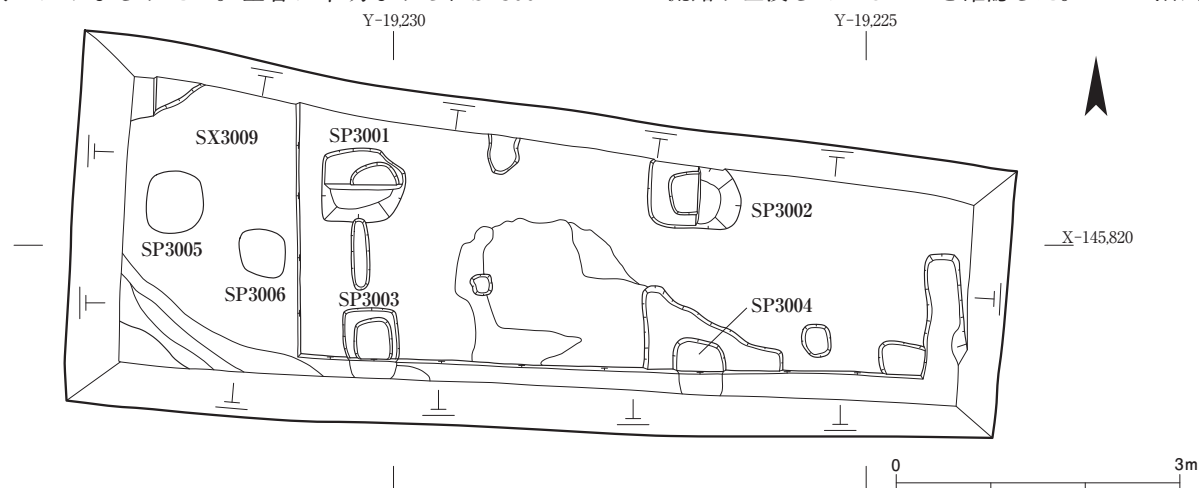


図238 第484次調査遺構平面図 1:80